

国際協力とジェンダー

家庭科 葎 内 ありさ
保健科 増 田 かやの

1. はじめに

本講座のねらいは、ジェンダーの視点を踏まえて、グローバルに諸問題を捉え発信し得る力を持つ女性リーダー育成を目指すことである。具体的には、教育課程の確立、世界各地で抱える貧困や紛争、女性の地位の低さの問題について現状を理解する。一方、女性の立場に配慮した援助や開発による、新たな問題解決方法について、世界各地の女性・男性のあり方や諸課題の背景を探る。解決・解消に向けて私たちにどのような協力ができるか、海外の高校生との連携や共同研究も視野に入れ、幅広い角度から考え、手法を探る。さらに、グローバルな問題を考えるとともに、自己のあり方、生き方、進路といったキャリアデザインも合わせて考えつつ、自ら探求した過程や成果について対外的に発信していく力を養うものである。

2. 今年度の活動内容

前半は、お茶の水女子大学教授による講義として、戸谷陽子先生による「アートに表象されるジェンダー」、三浦徹先生による『『やさしい』イスラーム世界』のお話を伺った。また、グループワークを中心に、社会が抱える諸課題についてジェンダーの視点から分析・検討を行った。5月の連休中には Facebook COO シェリル・サンドバーグのジェンダーに関する著書「リーン・イン」の読書を課し、その後に読書会を実施した。国際協力のキーワードである MDGs と SDGs の概略を学び、さらにプラン・インターナショナル・ジャパンの事務局を訪問し、活動内容について理解を深めるフィールドワークを実施した。夏季休業中の課題として、探究レポート（学習した内容を踏まえて、ジェンダーや国際協力に関わる社会的課題を自分で設定し、調査内容や考察をレポートにまとめること）のほかに、国連東京本部主催の高校生スピーチコンテストへの応募を課した。なお、東京代表に選出された1名は全国大会に於いて第5位に入賞した。後半は、前半の活動を通して見えてきた課題の解決に取り組み、公的機関や NGO、民間会社と連携しながら支援活動を実施した。具体的には、ジェンダー問題への関心を高めることを目的とした発信を行うための SNS の活用やポスターの製作、啓発グッズの開発と販売（利益をプラン・インターナショナルに寄付）、複数の大使館と連携してのジェンダーに関するインタビュー調査、カンボジアの子どもたちのためのワークブックの開発と寄贈、チャリティーランへの参加、などをグループ単位で行った。

2.1. 本時の活動

- ① 2年生による班別発表：1年生には、「テーマの設定や探究のプロセス（苦労や成功した点）に特に注意を払い、2年生への質問のメモをとる」ことを指示した。
- ② グループ別質疑応答：1年生は、あらかじめ決めておいた班で2年生への質問を共有し、次の要領でまとめた。
 - 一つの意見や質問につき、一枚の付箋を使うこと。
 - 大きな文字で付箋に書くこと。
 - 質問は、黄色の付箋に 良かった点は、ピンクの付箋に書くこと。
- ③ 2年生との話し合い：1年生が質問したい2年生の班を回る。質問時間はおよそ5分間とし、なるべく多くの班を回ることができるよう配慮した。2年生は、1年生から受けた質問内容とその回答やその過程での新たな気づきをまとめておくよう指示をした。
- ④ 振り返り：③でまとめた質問内容や新たな気づきについて2年生が発表した。

2.2. 生徒の授業評価

生徒の授業評価は、以下の通りであった。

1年生の評価

1) 自分なりの疑問や課題をもって臨むことができた。	4.3
2) 疑問に感じたことなどは質問カードに記入したり、できるだけ質問したりしようとした。	4.2
3) 分科会で積極的に話し合いに関わろうとした。	4.2
4) 自分なりの疑問や課題に感じていたことを解消することができた。	4.3
5) 今日の発表会・分科会を通して探究の具体的なイメージをもてた。	4.4

2年生の評価

1) 発表に対して具体的にコメントができるよう、各グループの発表を聞くことができた。	4.2
2) 1年生の質問に応じたり、できるだけこちらから声をかけたりしようとした。	4.1
3) 分科会で積極的に話し合いに関わろうとした。	4.2
4) 「探究Ⅰ」の経験者として伝えるべきことを伝えられた。	4.2
5) 今日の発表会・分科会を通して改めて自分の1年間の取り組みを振り返ることができた。	4.5

(数値は5段階評価の平均値、5が最高値。対象：1年生17名、2年生19名)

2.3. まとめと今後の課題

1, 2年生の交流授業を通じて、1年生からは、探究活動の進め方や具体的なビジョンを捉えることができた、より良い活動につなげる意欲が高まったなどの感想があった。2年生からは、下級生へ伝えることで改めて学びを振り返り、探究Ⅰで得た学びを次の探究Ⅱで生かそうとする前向きな姿勢を示す感想が寄せられた。協働、連携などのキーワードも散見され、グローバル人材として重要な資質に気がついたことは評価できる。お互いに伝えあう機会は大切であるが、限られた時間の中でより効果的な発表、質疑応答の工夫をしていくことが今後の課題である。